

## ジェンダーを考える

大塚久美子さん（元大塚家具社長、クオリア・コンサルティング社長）



「自分に誠実に」と揮毫

前回の櫻井龍子・元最高裁判事のインタビューを読んだ、大塚久美子・元大塚家具社長から「ジェンダーは今また議論できる雰囲気になっていますね。以前は立場上言えなかったのですが、とても関心を持っています」とのメールが届きました。ならば、大いに語っていただきましょう！

というわけで、「ジェンダーを考える」第2弾は、大塚久美子さん（53）です。（聞き手 日本労働ペンクラブ幹事・保高睦美 取材は2021年8月24日、10月12日）

## 人生のスタートは、大塚家具の倉庫から

——昨年末、社長を退任されて、今はどうしていらっしゃるんですか？

大塚家具の社長に就任する前から自分でコンサルタント会社をやっていて、私は今、大塚家具の外側にいますけれども、家具とインテリアビジネスで引き続き、いろいろ動いています。

——生まれた時から家具に囲まれていたんですものね。

もともと祖父が、家具の製造をやりながら小売りも少しやっていました。

埼玉県春日部市は簞笥の街で、作りながら売るっていうのが割と普通だったんですよね。長男が製造、二男が営業というのが割と多いパターンで、父（勝久氏）は二男で、そろばんも得意で営業をやっていて。それで1969年（昭和44年）、25歳の時に独立して、私はその1年前に生まれました。家具が積んである倉庫の入り口に近い狭いスペースに住まいがあって。なので、人生のスタートは、創業期の大塚家具の倉庫の中だったんですよ。――物心つくころから、家業を見ていた。

朝から晩まで、トラックや人が出たり入ったりで。両親共働きで、3歳の時から保育園に入園しました。保育園から帰ってくると、社員の人たちに子守をしてもらってました。

家業との関係で全てのものが動くんですよ。両親は家の中でもずっと仕事の話をしてましたね。母は、自分の夫である父のことを家の中でも「社長」と呼んでいました。仕事の話の時は、やはり夫婦というよりは、社長と役員の関係でしたね。母が多分そういう線引きをしていたのだと思います。



## 跡取りは男の子、女の子は嫁に行く

――将来、自分も家業に携わるだろうという予感がありましたか。

いいえ。私が生まれた1年5か月後に弟（勝之氏）が生まれまして、やはり昭和の40年代って言うと、跡を継ぐのは男の子って言う雰囲気でしたから。

だから、弟は生まれた時から「後継者としてふさわしい人になりなさい」的な教育を受けているわけです。

もっと言うと、私、5人兄弟姉妹の長女で、女男女女男の順番なんです

けど、それは、両親が跡取り一人だけでは心配で、男の子が二人ほしかったからなんです。そういうことを言われると女の子としては面白くない。でも、そういうことが普通に言えてしまう社会の雰囲気だったんですよ。——大塚さんには、まったくプレッシャーはなかった？

女の子は早く嫁に行けるように、いわゆる女の子らしく愛嬌があって、家の片づけとか手伝いができるのがいい子。だから、すごく風当たりが冷たかったんですよ。気が利かない子は嫁に行ったら大変なことになるって。小学生の私にとって、家事育児が常に仕事であり、義務であり、しかもそれが得意でもない、果たせない義務なんです。私はそれを一生やっていくのかと思ったら、目の前が真っ暗みたい。 (笑)

## 中1で結婚しない予感

——大学は、一橋大学の経済学部に進まれました。

母は四大（四年制大学）に行くのと嫁の貰い手がなくなるからって、ずいぶん心配したんですよ。(笑)



——大塚さんの時代でも？

そう。結構こんこんと、短大だったら就職だってあるし、結婚する時だって夫の方が学歴も高く、収入も高いっていうのが当然だからって。逆は収まりが悪いっていうイメージが当時、すごく強かったわけですよ。

でも私、正直、中学校1, 2年の時には、結婚しないだろうな、という予感がしていたんですよ。世の中の仕組みが、女性が仕事も家庭も両方することには対応できてないと感じられて。女性も両方やる権利はあるけど、現実には両方できるかって言うと、スーパーマンでもな

い限り普通はできないから。体力の限界もあるしね。自分としてはどっちかを選ぶしかない。

別に結婚しないって決めたわけじゃないけど、よっぽどいい出会いじゃないと、結局自分の幸せって他人次第になっちゃうと思ったんですね。

——それを、小学校、中学校の時に感じた。

さっきも話しましたが、母は完全に共同創業者で、会社の役員として重要な意思決定については常に父と相談して決めていました。その苦勞が報われて、1980年（昭和55年）に店頭公開（後のジャスダック上場）する時、証券会社の担当者に「妻を役員にしておくのはおさまりが悪い」と言われて、母が役員から外されてしまいました。母の頑張りが、男性が普通にやるような形に収まっていなかったから評価されなかった。私が12歳の時で、それはやっぱりインパクトのある事件だったのです。

## 研究者になりたかった

——それで経済学部には？

もともと人間関係が上手ではなく内向的な性格だったので、研究者になれば最高だと思っていました。わからないことが怖い、世の中を理解したいっていう思いが強かったんですね。経済学の理論よりは、経済学説史とか経済哲学を学びたかったのです。



他に受験した大学は考古学科だったんですよ。文字になっていない歴史が考古学。つまり物を見ながらそこから推測する、謎解きの面白さにひかれていました。

——経済学と考古学。

「この道に進む」という断固とした意志で物事をする人じゃないんです

よね、多分。いつもどっちつかずで、まあ、縁があった方だな、みたいな  
感じで。

(第1回おわり)

※第2回「雇用とジェンダー」は12月13日にアップの予定です。